慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	長守善著 経済政策の理論
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.6 (1957. 6) ,p.541(97)- 544(100)
JaLC DOI	10.14991/001.19570601-0097
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570601-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国富ノ計算	ケネー「経済表の説明」	ミラボオ侯の「経済表と其解説」
生産階級 土地ノ資本価値	三三、四五五、〇〇〇、〇〇〇	三一、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇
生産階級 原投資総額	四、三三三、三四〇、〇〇〇	四、三三三、三四〇、〇〇〇
生産階級 再生産総額	二、五四三、三三三、〇〇〇	二、五二八、三三四、〇〇〇
生産階級ノ富	四〇、三三一、六六二、〇〇〇	三八、三七一、六七四、〇〇〇
不生産階級 原投資総額	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 年投資額	五三五、〇〇〇、〇〇〇	五三五、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 貨幣総額	一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 家屋総額	六、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 家財総額	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 貴金属総額	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級 武器・公共建物	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
不生産階級ノ富	一七、五三五、〇〇〇、〇〇〇	一六、五三五、〇〇〇、〇〇〇
一国ノ富ノ総額	五七、八五六、六六二、〇〇〇（五五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇）乃至（六〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇）	五四、八九六、六七四、〇〇〇（五五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇）

月刊 三色旗 六月号

「経済学」の効用……大矢知昇
想 都わすれ……守屋謙二
〔随〕ことば……野村兼太郎
無心有言……島田久吉
地主制と部落秩序……小池基之
神武景気の行衛……武村忠雄
——景気観測の仕方——
論理の世界（中）……沢田允茂
人類学の応用……須田昭義
生物と遺伝（一）……水野忠款
ロマン派初期から中期へ……野村光一
——音楽講座(六)——

◇定価一部三〇円・一年三六〇円・書店へ直接御申込下さい。

発行所 東京都高輪局 三田豊岡町八 慶応通信
（振替東京一五五四九七番）

書評及び紹介

長守善著

『経済政策の理論』

この書物は経済政策の理論として最も基本的な二つの問題を取り扱っている。その一つは、経済政策の目的すなわち価値判断に関するものであり、他の一つは、経済政策の行われる場としての経済体制の問題である。前者については、第一章　経済理論と経済政策、第二章　経済政策の目的、第三章　厚生経済学という順序で一二〇頁が割かれ、後者については、第四章　経済体制論として残りの約一〇〇頁が割り当てられている。

著者は初めに価値判断の問題に関する在来の見解を概括し、第二章においてこれらの見解をその特徴にしたがって三種に分類される。その一つは、経済政策の目的には倫理的な価値が不可避的にはいりこむことを主張するもの、その二つは、究極の目的にたいする反省を中断して、目的と手段とについての効果関連を問うに止まるもの、その三つは経済という社会現象そのものの中から経済政策の究極目的が確定されうると考えるものである。前の二種の見解にたいして著者は批判的であり、第三の立場をもってみずからの立場とする。第一の倫理主義のそれは、紹介者自身の主張するところである。著者がこれを排する主たる理由は、倫理的な価値の規定が抽象的であって、具体的内容性を持たないということと、この種の価値論は社会哲学の領域に属し、経済政策学の扱うべき領域に属するものではないということである。しかしながらわたくしをしていわしめるならば、抽象的であることは、むしろ価値の当然の性質であって、それを非難するいわれはない。大切な点はそれが形式的な規定で無内容であるかどうかという点に存するのである。たとえば経済性の原則の如く、最小手段、最大満足をもって人間の経済行為の原則とする場合、手段や満足の内容についてなんの規定もなく、したがって、最小といっても最大といっても、ひとびとの任意の決定事項である場合、かかる行為の準則は、形式的であり、無内容であるというにつきる。わたくしが著者の支持するヴィルブラントの立場についてその形式主義を批判するのも、その故である。しかるに倫理的価値の問題については、たとえばイギリス流の功利主義にせよ、ドイツ流の人格主義にせよ、抽象的ではあっても、決して単なる形式主義に止まるものではない。

さらに、著者が批判する第二の論点、すなわち倫理的価値が経済政策学の取り扱うべき領域に属さないという意見は、経済政策学の領域をどう限定するかに依存することである。わたくしの考え方によれば、価値の問題は経済現象に附著しているものであって、切り

離すことの適否は、研究視点に依存する。もしあくまでも事実の観察、説明、解釈という立場で考えるかぎり、価値の是非を論ずるにはおよばない。しかしながら、事実についての説明を行うばかりでなく、経済現象の当・不当、是非を論じようとするならば、価値の問題は必ず入りこんでくるのであり、しかも価値の根底は倫理的に考察されなければならないと考えられるのである。そして経済政策学こそはまさに価値的に判断することを要請されている当の学問にほかならない。

著者は第二の種類たる効果判断の立場についても賛成しない。その理由はこれが究極目的の問題から眼をそらしているからである。この種の判断は技術的な知識集積にとどまるが故に、政策の原理を提供しない。

かくして著者は第三の立場として支持し、かつ主張されるのは、ヴィルブラント流の「分析的理想」の立場である。これは、経済と称され、一般に理解されている現象そのものの中に、行為の規範が存するとし、それをもって政策の原理と考えるのである。ヴィルブラントによれば人間の経済行為とは、欲望にたいして稀少なる満足手段の獲得の行為である。人間にとっては欲望満足手段を確保することが、この経済行為の目的である。したがって手段の確保、または欠乏の防止があらゆる人間の共同の目標であるという。著者はいう「欠乏防止に役立つものはすべてのものにとり善であり、それを妨げるものはすべてのものにとり悪である」（著書五一頁）。ここで

いう善と悪は倫理的な意味を帯びるものでなく、経済的に好ましいか好ましくないかという意味であろうと思われる。この単純な経済生活の解釈が、ヴィルブラントの経済政策上の価値判断の基礎である。かれは、欠乏をたとえて人間の健康の害われている状態とし、欠乏の防止は医師が健康を恢復させるための処方を書いて治療する措置にたとえるのである。

かくの如き見解は、わたくしには一つは未証明前提の誤りを犯すものと思われる。すなわちそれは、目的がすでに経済という現象の定義のなかに含まれているからである。ヴィルブラントは分析によって目的を引き出すかの如く説くけれども、それに先立って、経済現象の定義が予定されている。この定義から目的が生まれるのである。

経済生活が欲望充足と手段の稀少性とから生ずるものであるとしても、この手段欠乏が防止されなければならないという至上命令は存しないのであって、ときには欠乏そのことが生活上の価値の実現に必要である場合も考えられるであろう。

ヴィルブラントの立場からいえることは、もしも欠乏の防止が必要であるならば、欠乏の防止のために勧告することは正当だということだけである。

著者はヴィルブラント流の考えを受けつぐ者として、ユルグン・ゼラヒムやテオドル・ビュッツの説を紹介する。しかし著者自身は分析的理想の説を受けいれながら、その内容の形式性、空虚さ（空虚さはわたくしの見解では上に指摘したトウトロギーから生ずる）に不満である。そして人間の経済生活の実質的内容が「国民所得の増大・均等・安定によって裏づけられるところの国民厚生以外には考えられない」といって、ピグウの経済的厚生の説に論旨を転換する。

われわれの経済生活がその経済的満足の大を求めているということは、常識的に異論のないことである。したがって経済政策の目的を経済的厚生の増大・均等・安定などに結びつけることは、常識論としては反対しないであろうが、学問的検討はこの常識論の分析と批判から始まるのである。一言で概括される厚生の増大・均等・安定という言葉の内容と相互の関係いかんを論ずるとき、学者の議論は必ずや厚生の内容に非経済的要因を発見する。そして再び価値判断論争が繰りひろげられるにちがいない。著者はこれらの論争は充分に反省した上で、再び常識的な「厚生」の観念に立ち戻ったのである。しかしその立ち戻り方は、「これ以外に考えられない」という一文に尽きるのであって、わたくしはそこに議論として十分尽くさざるものがあるのを感ずる。

しかし著者の学問的良心と学識は、第三章で展開される「厚生経済学」の紹介と批判において、高く評価されなければなるまい。著者はかつて「厚生経済学」なる一書を著わされているが、この部門における最近の内外の諸学者の見解はその旧著と相並んで、殆どもれなく紹介され、かつ批判されている。ことにピグウ以後の厚生経済学の内における価値判断論争は、著者によってくわしく検討されている。しかしながら、著者のくわしい紹介と検討ののちに、厚生経済学の難問についていかなる結論を得られたであろうかという点について、著者はピグウ以後の展開について明確な評価を下していない。著者はピグウの健全なる常識の立場をまもっておられるようである。

本書の後半をなす経済体制論は、主として計画経済の体制についての学説の紹介と批判が主な内容をなしている。

自由競争の経済体制が、かつての自由主義者の主張せるが如き形において維持しがたいのは、すでに現実の示すところである。しからば、その体制の転換はいかにして行われるか。それは一つの予測の問題であるとともに、他面において政策当局者の実践の問題である。体制の転換は、実践的に考えるかぎり、落ちつくべき姿としての一応の完成した体制を予想しなければならない。現代の経済問題は体制論のみによって答えることはできないが、政策原理の問題としては、一応の完成せる体制を考慮せざるを得ない。ことに現代の経済体制の特徴は一方において政治的に有力な社会主義計画経済の体制が支配していることである。そして多くの体制論は、計画経済の可能性、実用性、およびその型態論を中心とする。

著者はこれらの問題に就て豊富な文献の参照によって、計画経済論の最新の傾向を詳細に検討する。読者はこれによって一口に計画経済といわれる問題の多様性と複雑さをよく知らされるであろう。

著者ははじめに計画経済論の理論史を概括し、ミーゼス以前よりベルグソンに及ぶ。ついで計画経済の含む問題を指摘して、価格、

本書は、経済政策の根本問題を研究しようとするひとびとにたいし、最新の学説と最新の問題をひろい分野にわたって紹介し、かつ批判し、しかも著者自身の「厚生経済」の理想をそこに貫ぬいて論旨の一貫性に注意を払っていることは高く評価すべく、また広く推称さるべき好著である。（東洋経済新報社　A5判　二三二頁　四五〇円）

（気賀　健三）

ハロッド著
塩野谷九十九訳

『ケインズ伝 I』

本訳書は、R. F. Harrod, "The Life of John Maynard Keynes", 1951. pp. xvi+674 の全訳三分冊の中の第一分冊であり、ケインズの生誕より、イートン、ケムブリッジを経てインド省への勤務、ついでまもなく、キングス・カレッジのフェローとなって経済学を講ずるに至る第一世界大戦前夜までの時期についてのべられている。

本書を読んでまず感ずるのは、ケインズ自身の個性の偉大さはもとよりであるが、同時に彼の人間を形成してゆく環境のすばらしさである。いかなる社会にあっても、その発展の為には少数の真の知識人を必要とすることは常にいわれていることであるが、なかんず

投資、配分、貿易に分けてこれを論じ、つぎに、自由主義的計画経済の実際とその可能性を検討する。著者はナチス時代のドイツ流の統制経済とソヴェト流の計画経済とをふくめて、全体主義の計画経済と呼び、これにたいしては批判的な立場をとる。けだしそこには合理性と自由と創意が窒息して、権力と隷属したがって不合理・不自由の経済生活が生まれ、厚生の増大は望むべくもないと考えられるからである。

したがって著者はそれから眼を転じてイギリス流の計画経済に筆を移す。この型態は著者が、将来において期待さるべき最も好ましい福祉国家の経済体制として高く評価するところのものである。

最後に著者は近時のドイツにおいて一派をなしている「オルドー」学派について一言する。これはネオ・リベラリズムともいわれ、計画を全面的に排し、完全競争的な自由市場の復活を主張する一派である。この立場は計画と競争とを完く対立するものと考え、両立し難いとする。そし計画化は超越と非能率を生み厚生を害するとみる。したがって残された途は社会的指導のもとに競争の制度の恢復があるのみである。

しかし、紹介者も同様であるが、著者はこの派の非現実的考慮に対して懐疑的ならざるを得ない。実際の経済生活の構造が生産・分配・消費のあらゆる面において、個別的自由競争を許しがたい部面をもっている。この事実を考慮するかぎり、オルドー派の見解は、理論的興味以上を多くでるものではないと思われる。

く英国の知識人の果す使命は顕著である。ケインズは、この使命を担う卓抜した人間性をもつと共に、共通の価値、共通の感情を共にするよき師、よき同輩にめぐまれていた。人間を形成するものは、単なる抽象的な「公理」ではなくて、まさに一つの社会過程である。ケムブリッジにおけるよき伝統と進歩主義は、本書を読む人々に感銘を与えずにはおくまい。ケインズの生涯を語る人は、必ずといってよい程、ケムブリッジにおけるケインズの「ソサエティー」活動を重視する。それは後にブルームズベリーと呼ばれるものに発展したのであるが、知性においてすぐれ、感受性の強いこれら青年達は、ヴィクトリア時代の苛酷で残忍な偽と偽善に満ちた態度に叛逆し、愛と美を基調とする調和ある人間関係を唱えるムーアの善の「理想」に心酔した。このムーアの「理想」は、当時の社会においては、決して空想的なものではなかった。ヴィクトリア時代の冷酷にして、無趣味なそして又便宜的な人間関係に対する「純粋な洞察力と熱情的な強烈さとを」もつものであった。彼等は、偉大な覚醒の前夜にあることを感じていた。大学生時代にケインズを夢中にさせた関心事は、正にこの哲学と、「ソサエティー」であり、真理の使徒として同輩の間にあって、精神と人格を完成しようとする追求とであった。しかし彼は決して青二才の理想主義者ではなかった。この点ケインズの本質的にリアリストである反面がうかがわれる。彼の鋭敏な心は、絶えず問題のあらゆる面を捉えていたことは特筆するにたることである。後年「思い出の記」の中において、彼が若い時代の自分自身について、「われわれは、文明なるものが薄い心もとない外皮のようなものであるということに気づいていなかった」そして「われわれは、先輩たちの人生の秩序を打ちたてるための並々ならぬ業績や彼等がこの秩序を保護するために工夫した精巧な仕組に敬意を払うという気が起らなかった」と書いている。がハロッドは、本書において、ケインズが既に学生時代にこのことを知っていることを指摘している。ケインズは一九〇四年の長期休暇に、バーク（一七二九年―九七年イギリスの政治家、作家）に関する論文を書いているが、この中で彼は既定の事物を擁護しようとする考え方を含めたこの著者の観点に多くの同情を示している。とまれ彼は「実際の決断を下すときは、反対の立場の長所のすべてをも認識し尽していた。」かくしてケインズは、時代に対する叛逆の種と論争家として彼が常に安全なるパイロットであることの素質を、学生生活において養成した。

第一章　家庭とイートン　ケインズは、一八八三年六月五日、ハーヴェイロード六番地、静かなケムブリッジの街中のどっしりした広大なヴィクトリア王朝風の家で生まれた。彼の父は、ジョン・ネヴィル・ケインズであり、論理学と経済学の講師として、また有能な大学管理者として著名はケムブリッジの教師であった。彼の妻は、実践的な性格をもち、多くの社会的な活動に関係していた。彼女は少年職業紹介所を計画した最初の人々のひとりであった。当時の英国は、物質的発展の力強い上昇傾向のうちにあり、イギリス帝